Operation Raleigh News

Operation Raleigh DENSO

No.31

昭和62年(1987)5月10日(日)
毎月1回発行

●発行所　オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1−7−10 築地オーミビル502号
電話　東京(03)544−7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

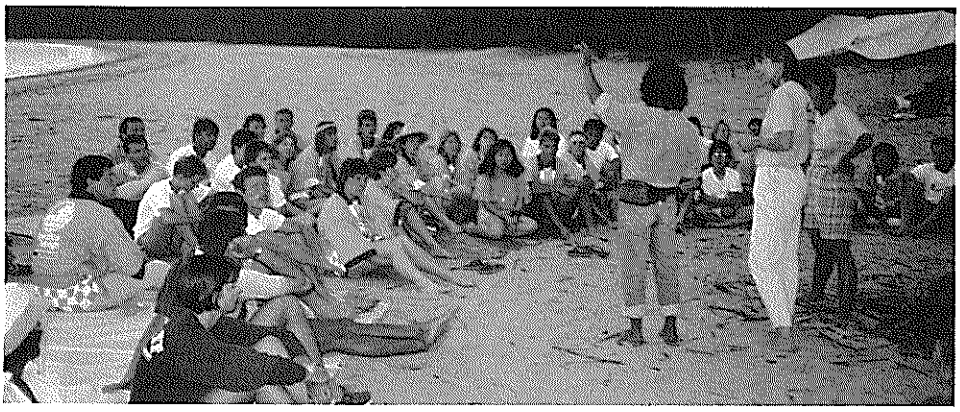
列島吹きぬけるアドベンチャー旋風

日本フェイズは北海道知床半島、沖縄西表島、本州東海自然歩道、吉野熊野国立公園などに分かれて、さまざまな活動が展開されています。その活動ぶりは、それぞれの土地っ子の関心や共感を呼び、心のこもった歓待を受けたり、地元の行事やお祭りに参加するなど、積極的に国際交流の輪を広げています。

また「知床半島縦走」「木曽川いかだ下り」「大峰山奥駆修行」など冒険プロジェクトも無事、当初の計画を達成。マスコミを始め、各方面から高い評価を受けました。

▲北海道グループ：雪上訓練(4月11日)

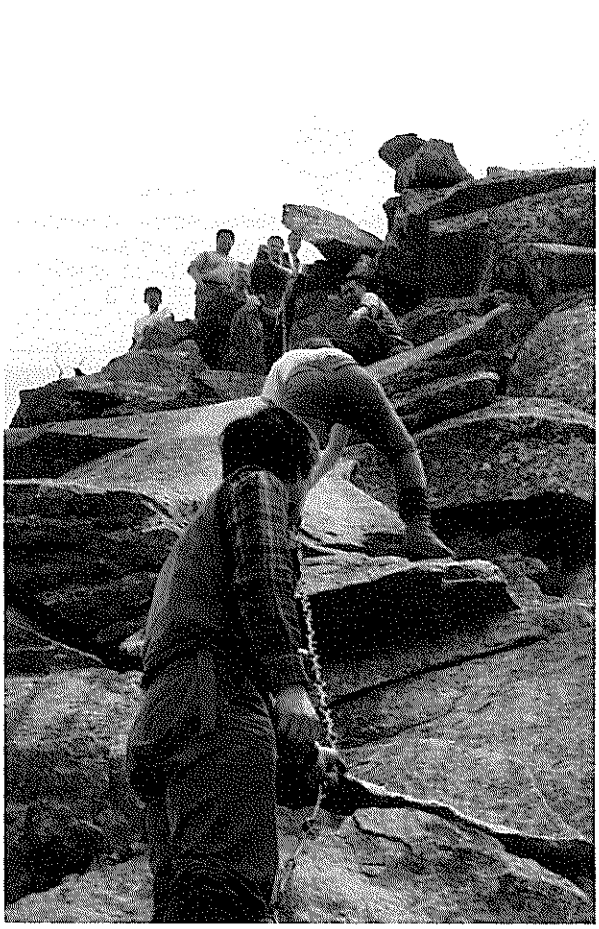
▲本州Aグループ：木曽川の激流を手づくりのいかだで下る(4月20日)

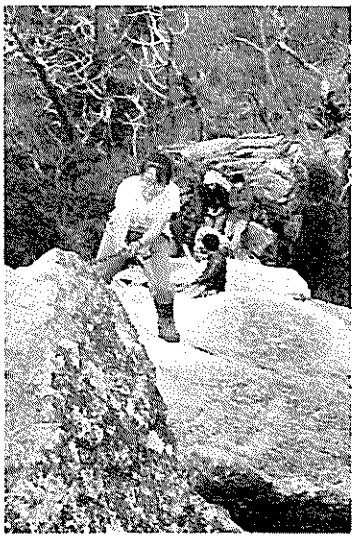


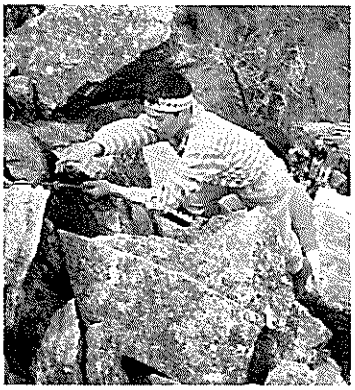
▲沖縄グループ：ベースキャンプ前のムーンビーチで(4月12日)

▲本州Bグループ：京都笠置町でキャンプ(4月14日)

北から南から冒険者たちの意気高し







▲大峰山奥駆修行に挑むベンチャラーたち

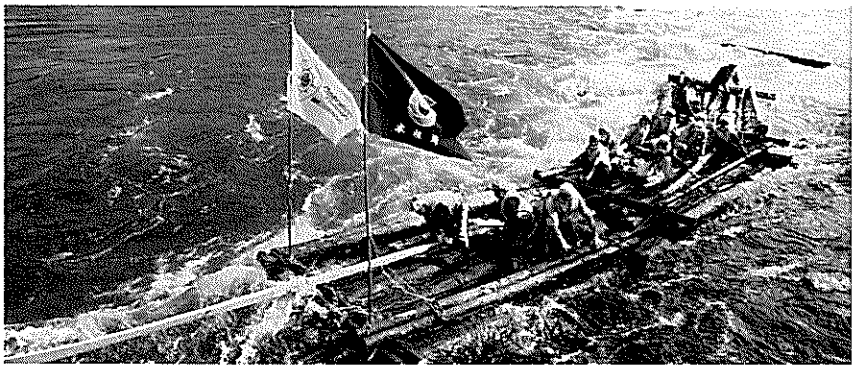
本州プログラム

本州Aグループ

難所で岩に激突 いかだはバラバラ

4月7日に大阪の箕面を出発した本州Aグループは、初日から大変な苦労を強いられました。東海自然歩道は予想以上に整備されておらず、工事で寸断されていたり、別れ道が何本もあって、一日の行程平均30kmをこなすのは至難のわざでした。37kmを歩いたときは午前6時に出て、目的地に全員が着いたのが午前0時近くでした。ベンチャラーたちは足にいくつもマメをつくって、杖をつきながら歩いているのもいたほどです。それでもできるだけ荷物を減らした結果、ひとりの落伍者もなく、みんな元気に1週間の行程を終え15日には木曽川のいかだ下りプロジェクトのため、美濃加茂のベースキャンプに着きました。ここで5日間いかだを組んだり、操作訓練を受け20日に出発です。いかだづくりは、まず藤づるを採ることから始まり、カイをつくり、太さ60cm以上ある丸太を6本組み合わせたものを3枚つなげます。71才の元いかだ師渡辺重男さんただひとりが正しいいかだの組み方を知っています。ベンチャラーは、一体となり、渡辺さんの指導で見事ないかだをつくりあげました。いかだの上には、デンソーマークの入ったOR旗もひるがえっています。20日の朝7時30分、7人のベンチャラーと、2人の船頭さんを乗せたいかだは木曽川・日本ラインの
チャレンジしました。途中
所でカーブを曲り切れず、
し、まっぷたつに分れ、丸
バラになりましたが、全員
く、いかだをすぐ組み直し
間遅れで犬山まで下ること
した。が、犬山の頭首工（
ダム)からおろすとき、いか
にバラバラになり、午後3
時間かけてベンチャラーだ
直しました。犬山の下流は
ないために、いかだは1日
途中で何度も座礁しました。
にベンチャラーは、冷たい
でつかって押しながら進み、
した。
(4月21日／藤本圭太＝本州プロク
リーダー)

本州Aグループは、4月25日
木曽三川治水百周年記念事業
ング式典に参加。さらに5月1
知県足助町に入り、町をあげ
を受けた。Aグループは5月21
助町に滞在し、伝統工芸や座
取り組む。



本州Bグループ

1日30kmを踏
大峰山奥駆も

あれよこれよと考えてい
日本フェイズは始まってし
た。4月7～8日は箕面の
場でおだやかな日を過ごし、
グループは9日朝5時起床、
分出発。この時間割は毎日
同じです。初日は30km歩き、
29km、11日24kmというスケ
なのだが、最初の日は先発
隊とも道に迷い、キャンプ
時45分。距離的に不可能で
だが、各自15kgほどの荷物

急流に
大の難
に激突
がバラ
ガもな
約2時
できま
流調整
は完全
から2
で組み
量が少
行程の
その度
に腰ま
大変で

ム・サブ

かだで
ープニ
には愛
の歓迎
まで足
などに

皮
験

間に、
ハまし
ャンプ
本州B
6時30
とんど
10日も
ュール
、後発
は夜8
ないの
もち、

◀三枚のいかだで激流を下る

地図読みが不慣れなこともあったようだ。2日目は朝からみんな足がはれたり、マメをつくったりのベンチャラーもいるようだ。先発隊が後発隊のために目印テープをつけていくのもスムーズにいかない。私は先発隊で道を探していく方なのだが、途中で道に迷う。確かな道でないときは必ずわかるところまで戻る、という鉄則を守らなかったばかりに2時間ロスし、2日目キャンプサイトに着いたのは夜11時45分。暗くなってからは道も見つけにくいし、後発隊

▲吉野→山上ヶ岳の途中で休憩

は目印テープが見えないし、悪循環である。3日目は24km。みんな足をはらし、ペースが遅い。キャンプ着は夕方6時。この時点で1日25km以上、午後6時以降は歩かないという決定に至る。

さて、全員で22人というグループは適当です。そろそろお互いのことを知り始め、食事当番の順番もうまくベンチャラーたちが自主的に決めています。海外からのベンチャラーはみんな日本に興味があり、サムライ、お寺などとてもよく知っています。日本人ベンチャラーから日本語を習い、あちこちで「こんにちは」「ありがとう」などの言葉が飛びかっています。最初の3～4日は歩くだけで精一杯、景色や建物を見る時間がなかったのですが、休日に京都の神社やお風呂に行き、大満足していました。

(4月16日／平野裕加里＝本州プログラム・サブリーダー)

本州Bグループは、4月19日から1週間大峰山で奥駆修行を体験。険しい山中でのハードなスケジュールをこなし、和歌山県川湯に到着。休息のため予定の一部を変更し、4日間滞在。地元の人々との交流イベントに参加の後、高野山へ出発した。

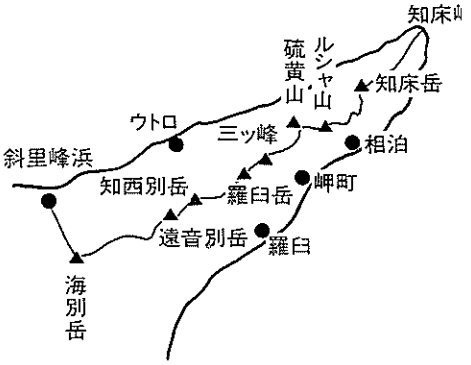
外国隊では初の快挙
知床半島縦走に成功

海別岳～知床岬
残雪の中を完全縦走

大阪から羅臼までの移動は非常にスムーズにいきました。移動中は例によって船の中でも汽車の中でも大騒ぎで、羅臼のベースキャンプに着いたときには、みんな騒ぎ疲れていたようです。しかし、北海道プログラムのベンチャラーは質が高く、スタッフが必要なことだけ伝えると、後は彼らがすべて話し合って仕事をしてくれるので助かります。

日本人ベンチャラーへの対応も至れり尽せりで、ミーティング中は常に1人に2人ぐらいのベンチャラーがつき、話の内容を説明し、みんなが参加できるように気を配っています。

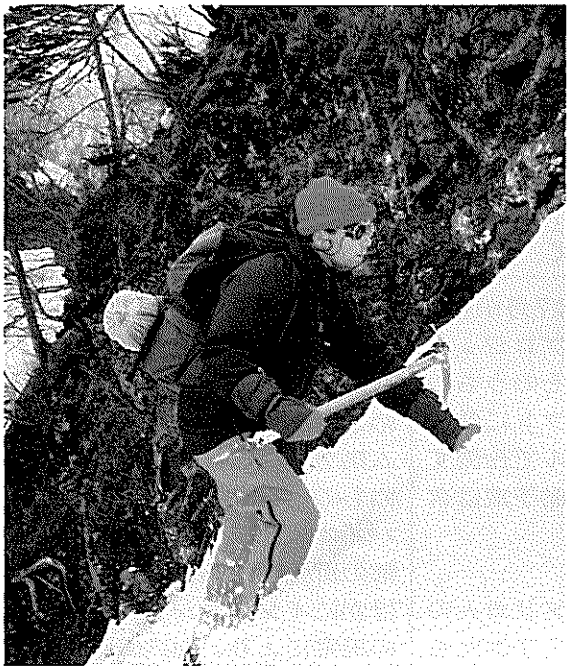
10日と11日はベースキャンプの近くで軽い雪上トレーニングをして、縦走隊とサポート隊にメンバーを分けました。明日から予定通り、縦走開始。登山口までは全員バスで行って、縦走隊6人とサポート隊9人を見送ることになっています。今夜は縦走前ということとディレクティングスタッフのシャーロンの誕生日なので盛大なジンギスカンパーティーが開かれます。きのうからベースに

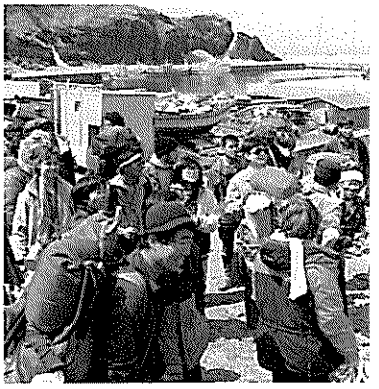


バーもでき、夜も楽しくなってきました。そんなわけで北海道プログラムは順調そのもの。まずは何としても縦走を成功させたいものです。

(4月12日／堀内一秀＝北海道プログラム・サブリーダー)

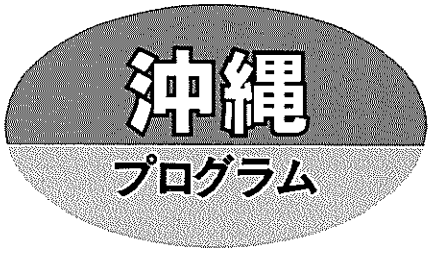
北海道グループは4月13日から約16日間、早春の知床半島完全縦走に挑戦。この試みは外国隊としては初めてのことで、雪やハイマツに覆われた1000m級の稜線を歩き、4月28日正午に知床岬へ無事到着した。翌29日船でベースキャンプのある羅臼に帰還した。同グループは5月中、公園整備・鮭の稚魚放流などを体験する。


▲縦走出発前の雪上訓練



▲写真上下とも知床岬文吉湾で

沖縄グループは４月下旬３班に分かれ、ウミガメ調査（石垣・西表）やサバニ船練習などを行なった。５月には糞や痕跡を捜すイリオモテヤマネコ調査、炭鉱調査（仲良川・内離島）、遺跡調査などを予定。また中旬には、西表島から沖縄本島まで「黒潮文化をたどるサバニ船の旅」が出発する。



▲サンシ（蛇皮線）を聞くベンチャラーたち

雨のち晴れ 5月中旬サバニ船出発へ

▲ベンチャラーみんなでカヤブキの小屋づくり

干満の差にびっくり 白いご飯炊き成功

西表島に着いてはや１週間。ベースキャンプもセットされ、３日後にはもうプロジェクト入りです。西表島は暑いといいたいところですが、雨ばかり、みな少々ダウン気味でしたが、本日初めて青空が少し見えて元気が出たようです。食事はといえば、外国人が調理する日本食ですから説明するまでもありませんが、不思議なものを食べて生きのびているという感じです。しかし、今晩は日本人の愛する白いご飯を炊き、いままでの失敗を挽回しました。(何せ一度に30合ですからねえ)

ベースキャンプのそばには大きな砂浜のビーチがありますが、その海の干満の差の大きさにびっくりします。私たちのベースキャンプは大きなカヤブキ小屋で雨風を防いでいます。確かにすごい生活です。ヘビもたくさんいます。（以上４月16日）

いま、ウミガメの卵さがしから帰ったところです。西表島ではまだカメの卵を食べる人もいるようで、とられていることが多いのです。私のグループは６人で西表島を歩き、産卵場所を探しましたが発見できず。他のグループは２つ見つけたそうです。西表島の人は本当によい人ばかりで、夜は宴会に呼んでくれ、サンシ＝蛇皮線にあわせて外国人が踊り狂っています。

雨もやみ、夏まっさかりです。あとは梅雨と台風を待つばかり。この小屋やテントはいつまでもつのでしょうか。ラーメン、スパゲティ、私は一生で食べる麺類の半分以上を食べました。

(4月27日／郡由起子＝沖縄プログラム・サブリーダー)

サバニ船で帆走テスト 練習方法など話し合い

ベースキャンプに入った11日以来降り続いていた雨もようやくやみ、昨日初めて太陽が顔をのぞかせました。ベンチャラーたちは早速海に飛び込んだり、砂浜で肌を焼いたりと久しぶりの太陽を存分に楽しんでいました。ベースキャンプでは西表島に住む方々が建ててくださった「カヤブキ小屋」をまねて、ベンチャラーだけでキッチン用の小屋を建てたり、竹やカヤを使ってテーブル、床などをつくったりし、ベースキャンプの設営も一通り終りました。

２日前から西表島に住む山下さんが滞在されて、ベンチャラーたちを底網漁に連れていってくださいました。獲れた魚の内臓を取り出す作業や魚のバーベキューにみんな歓声をあげていました。食事は冷蔵庫がなく保存がきかないため、４～５日おきに届く肉をドバッと食べて、後は菜食という組み合わせです。食事の質に関しては不満が多いようで、買い出しに行くと、その後キャンプ内にチョコレートやキャンデーが出回ります。

いよいよ19日からプロジェクトが始まります。ベースキャンプに残るサバニ組を含め、５グループに分かれるので、相互の連絡がうまくいくでしょうか。僕らサバニ組は基本的には１ヵ月間ベースキャンプにとどまりサバニの練習をしますが、クルーの間では毎日ランニングなどをして、体力づくりをしていこうという話も出ています。（以上４月18日）

22日にはサバニに帆を張り、１時間半かけて白浜まで行きました。風を受けて帆走するサバニに乗っている気分は最高です。出発まであと３週間、夜食事の後に今後の練習方法など話し合って決めています。サバニ組はサバニの練習以外プロジェクトがないので西表島の「幻の湖」と呼ばれるところへ行こうという話が盛りあがっています。

(4月26日／渡辺道雄＝沖縄プログラム・サブリーダー)

日本フェイズ TOPICS

「なかなか!よい!」いかだ下り

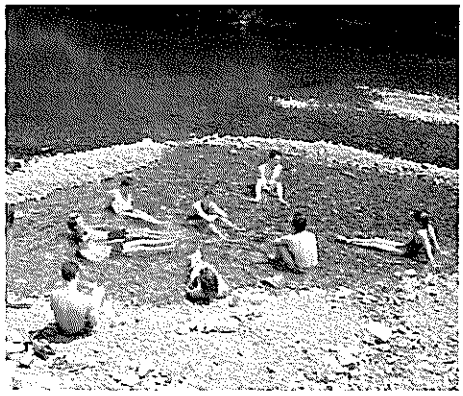
●本州Aグループ●

▲治水神社前でいかだを解体

木曽川いかだ下りは4月25日見事にゴールしましたが、途中でさまざまな困難が待っていました。メンバーの2～3人がいかだの材木ヒノキにかぶれた皮膚炎事件、急流で岩に激突したいかだ分断ベンチャラー水難事件、犬山頭首工(ダム)船通しでのいかだバラバラ事件、中流域での浅瀬座礁事件などなど。しかし終りよければすべてよし。トニー・ウォルトン本部長得意の掛け声「NAKA NAKA YOI!」という結果になりました。

奥駆修行崖吊りに悲鳴

●本州Bグループ●



▲川湯温泉で疲れをいやすベンチャラー

4月19日からの大峰山奥駆修行を終えた本州Bグループは、26日和歌山県川湯に到着しました。険しい山中では残雪が飲料水がわり。厳しい修行で崖から吊された高所恐怖症の外国人ベンチャラーが悲鳴をあげる一幕もありましたが、全員無事下山しました。ベンチャラーの一人は、「疲れ果てて眠っても、朝になるとまたファイトがわいた」と苦しかった一週間を振り返っていました。また日本独特の宗教的な体験をした外国人ベンチャラーは、「以前から日本の文化や宗教には興味があり、自然信仰は神秘的で貴重な体験だったが、あえて自らを困難な状況におきそれに打ち勝つことで何かを見いだすといった思想は理解できない」と感想を話してくれました。また今後は日本人の日常的な生活や文化にも触れたいと話していました。

羅臼町で大歓迎受ける

●北海道グループ●

▲羅臼町主催の歓迎セレモニー

4月7日大阪港でのオープニングセレモニーに参加した北海道プログラム参加メンバー42人は、大阪発青森行日本海1号ー青函航路ー函館本線ー室蘭本線ー石勝線ー根室本線経由で釧路へ。釧路からはバスで4月8日深夜に羅臼に到着しました。

翌日は羅臼町公民館で、羅臼町あげての歓迎会。郷土芸能「知床いぶきたる」の演奏による歓迎はベンチャラーたちに大きな感銘を与えたようです。町長の英語による歓迎スピーチ、リーダーのマイケル・シュー氏の日本語をまじえたあいさつなどのあと、トドのバラ焼きはじめ特産物で立食パーティー。最後は参加者全員で「知床旅情」を合唱し、交流を深めました。

なお、北海道プログラムの主要プロジェクトである知床半島雪中縦走は、4月13日斜里峰浜から海別岳に入り、遠音別岳、知西別岳、羅臼岳硫黄山、ルシャ山、知床岳、知床岬のコースを踏破、ほぼ予定通り4月28日に半島縦走を成し遂げました。

Bon Voyage!
よい航海を!

帆船ゼブ号ダーウィンへ

4月9日大阪港を出航した帆船ゼブ号は14日午前11時、日本最後の寄港地である東京晴海埠頭に到着。東京都港湾局、ORJC主催の歓迎セレモニーに参加しました。ゼブ号は東京港に停泊中、船内公開、東京湾内体験クルーズなどを行ない、4月21日オーストラリアのダーウィンに向けて出航しました。ゼブ号には大阪で交代した山本久仁子さん、飯塚敏晃君ら16人のベンチャラーたちが乗っています。

▲ゆっくり岸壁を離れるゼブ号

▲テープで別れを惜しむベンチャラー

日本代表派遣青年のページ

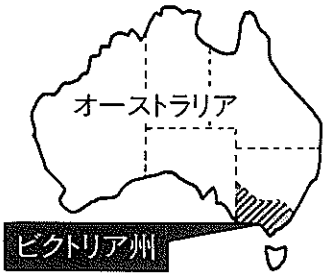
季節は秋へ……豪州フェイズだより

３月からオーストラリア・ビクトリア州フェイズに参加している、田子真也君から近況を知らせる報告が届きました。元気に活動中の様子を、お知らせします。

国立公園で岩ワラビー調査

本格的なキャンプ

ビクトリア・フェイズでは、ベンチャラーは140人ぐらいで英国120人、米国10人、日本６人、イタリア２人、カナダ１人という構成です。１班８名程度で15～16グループに班分けされています。活動地は、「サンセット砂漠」「ウィルソンズ岬」「ティンガリンガリー国立公園」に分けられ、最初、金田君、砂子さん、岸さんが砂漠組、高田君、藤原君が岬組、僕は英国５人、米国２人に、僕の８人編成で、国立公園組に配属されました。ティンガリンガリー国立公園では岩ワラビー（小形カンガルー）の調査で本格的なキャンプ生活を過ごしました。夜は２人用テントで、食糧は軍隊用缶詰だけ。薮歩きなので大変疲れましたが、ナビゲーションや山の天気など学ぶこともたくさんありました。



ビクトリア・フェイズは施設、移動用飛行機、食糧などとても組織化されており、本当に貴重な時間を過ごしています。いま僕らの班は砂漠でのプロジェクトに移動し、そこでこの手紙を書いています。日本ではゼブ号や日本フェイズなど話題が盛りだくさんな頃だと思います。

（4月2日・田子真也）

1987年度活動

英国本部から発表

ＯＲ英国本部からＯＲＪＣ事務局に1987年におけるオペレーション・ローリーの活動計画が届きました。

ゼブ号フェイズ

（ダーウィン～セイシェル）

ベンチャラー16名は、ダーウィンでゼブ号と合流します。６月から９月にかけて、ダーウィンからセイシェルまで長いインド洋横断の航海をする間に、ゼブ号は食糧や水の調達のためにいくつかの島々に立寄り、各地で航海トレーニングをはじめ、予定されているさまざまなプログラムに取り組みます。

マレーシアフェイズ

100名のベンチャラーは7月から9月までの間、３つの主要プロジェクト地域に分れて活動し、そのうちの２地域で３つのプロジェクトに参加した後、クアラルンプールで合流する予定です。各地での活動予定は次のとおりです。

＊マレーシア半島

原住民の住む村で、アメリカ人の外科医のチームを手伝って子供たちの病気治療にあたります。また古代文字の調査、医療施設・治水施設の整備などのほか、ダイビング・トレーニング、象の保護のための生態調査なども含まれています。

＊サラワク

山あいの村できれいな水を確保するために、山や森林にパイプラインを通して行なう灌がい作業のプロジェクト。

＊サバハ

詳細はまだ未定ですが、いくつかの科学プロジェクトを行なう予定。

インドネシアフェイズ

オペレーション・ローリーではこれまでも世界各地の熱帯雨林で生物学的研究を行なってきましたが、７月から９月に実施されるこのインドネシアフェイズでは、特に研究の成果が天然資源保全や自然環境保護の一助となりうる、より高度なものをめざします。そのおもな内容はセラム島を舞台にした昆虫（特に草食性のもの）の空間分布及び活動の調査、バイオ資源の研究、さらには絶滅寸前の野生の豚の保護などです。そのほかにインドネシア国際委員会からの提案により、白内障治療活動も予定されています。

パキスタンフェイズ

９月から11月にかけてのプロジェクトの中心は、地図に載っていない北方地域です。ベンチャラーはここから３つのルートに分れて地図の地形をたどります。また可能ならばイスラマバード大学と協力して、氷河研究のプロジェクトも行なう予定です。そのほかにも奉仕活動やカラコラム領域で200マイルにおよぶトレッキング調査などのプログラムが組まれています。

ゼブ号フェイズ

（セイシェル～ケープタウン）

このフェイズでは、ゼブ号はセイシェルからアフリカの東海岸沿いに９月から11月にかけて航海します。ベンチャラーたちは、途中いくつかの地上プロジェクトのためにケニアを訪れることになるかもしれません。

ゼブ号フェイズ

（ケープタウン～ブラジル）

ベンチャラーたちは、ケープタウンでゼブ号に乗船する予定です。そして11月から来年の２月にわたる、ブラジル・リオデジャネイロまでの長い旅に備えて、食料の積み込みなどの準備をします。ゼブ号の航路はセントヘレナ島経由、南大西洋横断というルートです。